

日向薬事始め (その5)¹⁻⁴⁾

一日向出身の緒方洪庵・適塾と広瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々―

山本 郁男、井本 真澄、宇佐見 則行、岸 信行*

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences
in Hyuga (Miyazaki) (Part 5)¹⁻⁴⁾

— On Some Students Studied under Mr. Kouan Ogata at Tekijuku in Osaka and Mr. Tansou Hirose
at Kangien in Hita-Bungo (Ôita) during the Edo-period from Hyuga (Miyazaki) —

Ikuo YAMAMOTO, Masumi IMOTO, Noriyuki USAMI and Nobuyuki KISHI*

Abstract

This paper is a historical review of Edo period students from Hyuga, and their influence on medicinal and pharmaceutical sciences in the Hyuga area, which is now Miyazaki-ken. These students studied in Osaka and Ôita. Seven of these students studied with Mr. Kouan Ogata at Tekijuku in Osaka. Fifty-four of these students studied with Mr. Tansou Hirose at Kangien in Hita-Bungo, in modern day Ôita.

Key words : Hyuga, Kouan Ogata, Tansou Hirose, Edo-period

キーワード : 日向、緒方洪庵、広瀬淡窓、江戸時代

2008.11.26受理

緒言

日向の地理的、歴史的、文教的背景

前報¹⁻⁴⁾までに、江戸時代、日向(宮崎)の医薬の教育あるいは発展に貢献、関与した人々、すなわち秋月橋門¹⁾、加来飛霞²⁾、渡邊正庵³⁾、白瀬道順⁴⁾らをとりあげ、彼らの業績について報告した。

本報では、江戸末期、日本の果てともいえる僻地日向から、笈を負うてはるばる日本最大の私塾、大坂の緒方洪庵の「適塾」。そして、天領、豊後日田(大分)の広瀬淡窓の「咸宜園」に学んだ若者達がいた。前者に8名、後者に61名いたことが判明した。しかし、文献も少なく限られており、すべてを追跡することは困難であったが後者には本研究の主題である医家志望者も少なからず見出されたことから、新しい切り口で調査したのでここに報告する。

1. 地理的背景

日向は、古くは「ヒムカ」と呼んだ。江戸時代の国名である。同様に筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後といった頃の時代である。一方、九州は東部の太平洋に面した海を日向灘という(図-1)。すなわち日向には東よりいずる太陽(日)に向かうという意味があるらしい。南北に連なる海岸線の多くはリアス式であり、あまたの天然の良港(例えば細島港や美々津港)がある。江戸時代、関西(大坂)に行くにはこれらの港から馬関(現在の下関)をめざし、豊予海峡(現在の豊後水道)を北上して瀬戸内海に入り、大坂に至る水路をとった。それでも約2週間を要したという。大変な労であったと察せられる。また、日田に行くには北は九州山脈の峰々が大

九州保健福祉大学薬学部衛生薬学講座 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1
Department of Hygienic Chemistry, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1
Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN
*北小路調剤薬局。〒882-0041 宮崎県延岡市北小路14-28
Kitakoji Dispensing Pharmacy, 14-28 Kitakoji, Nobeoka, Miyazaki 882-0041 JAPAN
九州保健福祉大学 QOL研究機構 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1
Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare 1714-1
Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

きく立ちはだかつていたため、徒歩では5-6日はかかったことであろう。これまた、相当な難儀であったと考えられる。



図-1 九州の諸藩・城下町⁽³⁾

2. 歴史的背景

戦国時代以後、1590（天正18）年、豊臣秀吉は九州の諸大名（島津、伊藤、相良、竜造寺、大友）に「私戦禁止令」、「九州国分令」を発したことによって事実上の全国統一をはたした。しかしながら、日向は島津、秋月、高橋氏らの土着の豪族がいたため、豊臣秀吉は島津豊久に都（すいたか）と佐土原。伊藤祐兵に伊集院忠房（いむねさだ）と曾井、清武と飢肥。秋月種実（あきづね）に財部と櫛間。高橋元種（たかはしげん）に縣（現在の延岡）と宮崎の領土を与えた。従って各々の藩は全国に比して極めて小さい面積の多くの小藩が成立したことになる。1594（文禄3）年、さらに秀吉による「太閤検地」により多数の領主が移動させられた。徳川幕府の治政の下、日向では元禄期（げんらく）に山陰百姓一揆を源として各大名の移封が漸行された。それに伴い、天領、藩領を散在させることによって各藩を警戒、監視した。天領の設置は戦略上の要地として当て、幕府が統治下に置くという意味があった。しかし、この天領には教養ある代官が中央



図-2 太閤検地後の日向諸領

から赴任したこと、また江戸、大坂、博多からの情報がいち早く入り、さらに学問の発達を促す儒者、医者、商人など、知識人の頻繁な交流があったことから日向の文化発展への十分な寄与が考えられる。

3. 文教的背景

元禄期（1688）に日向国に頻発した農民らの一揆は延岡藩に内藤氏という譜代大名を

1747（延享4）年に入封せしめた。また、その他の藩として、高鍋、佐土原、飢肥、薩摩藩が存続していた。先に述べた天領は白杵郡の富高、日知屋、細島、財光寺、平岩、塩見。那珂郡には江田、新別府、吉村、福島、下別府。宮崎郡には船引、細江。児湯郡には現王島、黒宇野、清水、岡富、三宅、右松、調殿、童子丸、

南方、穂北。諸県郡には須志田。内藤氏の前の藩主、有馬氏の時代にはすでに本庄、塚原、森永と竹田はすでに天領になっていたなど日向の文教的発展はこれら天領の存在なくして語ることはできない。多くの優秀な子弟はこれらの藩から輩出している。特に延岡藩主初代内藤政樹は幼

少時より学問や俳句を学び、長じて、関孝和流の算術、天文学に格段の興味をもったこともあり、藩内には自然と学問が盛んとなる風潮が芽ばえた。江戸時代初期は学問をするのは武士や僧など一部階層に限られていたのが、中期から後期になると急速に一般庶民にもその気運が高まってきた。特に延岡藩や高鍋藩は江戸、大坂に遠いにもかかわらず国内でもレベルの高い教育が行われ、向学の青年が続々と出てきた。また、多くの学者が延岡に招致された。1732（享保17）年久留米生まれの松永良弼、松山生まれの久留島喜内などの数学者



図-3 関ヶ原合戦後の日向諸領



図-4 山陰百姓一揆後の日向諸領

が前述の内藤政樹の下に仕官した。政樹の教育論は「教育とは覚えることに非ず、考えることを優先とする」としていたことは注視に値する。初代藩主政樹の後を継いだのは第2代政陽であり、1768（明和5）年、日向の各藩よりいち早く学問所と武芸所を城内に建設、1850（嘉永3）年にはこれらを合体、広業館と命名、文武両道の奨励を行った。その内容は、素読、和学、漢学、漢算、洋算など多岐にわたっていた。さらに1857（安政4）年、新妻金夫、早川図書によって医学所「明道館」が開設され、ここに医師の養成教育が本格的に行われるようになった。高鍋藩も秋月種長の時、1604（慶長9）年3万石の小藩であったが、学問振興に努め、藩校、明倫館を創建。佐土原藩は1825（文政8）年、藩校、学習館。飩肥藩も振徳堂。のちに安井息軒を登用しての明教堂を創建などは特記すべきことである。これらが本論文の主題とする日田（大分）や大坂のみならず関西の華岡青洲1759-1835（宝暦9-天保6）年、頼山陽1780-1832（安永9-天保3）年、山脇東洋1705-1762（宝永2-宝暦12）の下に学んだ者も少なからずいたという契機を与えたといえる。

日向出身の「適塾」門人たち

大坂、「適塾」の創設者は有名な緒方洪庵である。洪庵については多くの著作⁵⁻⁶⁾などによって書かれているので今さらとの感も強いが、若干その生い立ちに触れておきたい。緒方洪庵は1810（文化7）年7月14日、備中（岡山県）足守藩（外様）の藩士（33俵4人扶持）緒方惟因の末男として生まれた。1825（文政8）



図-5 緒方 洪庵⁶⁾

年16才の時、父が足守藩、大坂の蔵屋敷（近世、諸大名が貨幣入手の必要から領内の米穀その他の物産を貯蔵、販売するため、大坂、大津、江戸などに設けた屋敷。倉庫と販売事務所。今日の支店あるいは出張所にあたる）の留守居（諸藩との連絡用人の職名）となったため大坂に出る。翌年、父と共に一旦、帰郷したが、生来身体弱く、武士には向かないと思い医師を志す。その後、蘭方医である中天游1783-1835（天明3-天保6）年に学び、21才の時、江戸に出て坪井正道（1795-1848（寛政7-嘉永元）年）の下で蘭医を修める。24才で宇田川榛斉（1769-1834（明和6-天保5）年）に師事して薬品学を学び、1835（天保6）年に足守に帰り、再び1836（天



図-6 適塾⁶⁾

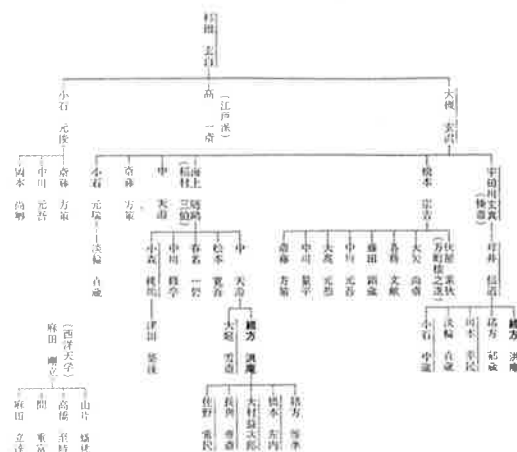


図-7 江戸末期の大坂蘭学学統一覧図⁶⁾

保7）年、長崎へ出た。長崎ではオランダ商館長ニーマンについて2年間蘭医学を修得した。1838（天保9）年、帰坂して瓦町（現在の北御堂筋の北）に「適々塾」と名付けた蘭学塾を開設した。1843（天保14）年瓦町の塾が手狭になったため、1843（天保14）年、過書町（現在の東区北浜3丁目）に移転、「適塾」と改名した。以後約20年間塾の経営に携わった。緒方洪庵は後に江戸に出て1862（文久2）年、幕府の侍医兼西洋医学所頭取と医師として最高位に昇りつめ、西洋医学の拡大、発展のため大きく貢献した。適塾生として後に有名になった者に福沢諭吉、橋本左内、大鳥圭介、高杉凌雲、武江斐三郎、花房虎太郎、佐野常民、大戸郁蔵、長與専吉、池田富喜、飯田芳平、松下元芳、山口良哉、相原益介、武谷棕亭、奥山静寂、渡辺卯三郎、藤野升八郎、笠原健蔵、島村興石、石井信、伊藤恒蔵、栗原唯、村田蔵六、緒方惟準らがいる。特に村田蔵六（後に大村益次郎に改名）1824-1869（文政7-明治2）は防府の蘭医、梅田幽斎の門に入り、さらに本論文の主題人物、日田（大分）の儒者、広瀬淡窓の咸宜園

にも入門している。1846（弘化3）年23才の時に適塾に入り、1849（嘉永2）年には塾頭にまでなっている。さらに明治初期の政治家となった異色の人物である。また、福沢諭吉は思想家、教育者として知られる慶応義塾大学の創始者である。さらに長與専斉は日本薬学、衛生学の基礎を創った大人物である。

1844（弘化元）年から始められた入門者記録帖には洪庵が江戸に下った1862（文久2）年までの塾生数は612名。その後1864（元治元）年には637名、署名をしていない門下生を入れると1,000人以上になるといわれている⁶⁾。図-7に江戸時代末期の大坂蘭学者の系図を示す。

日向出身の適塾門下生

日向（宮崎県のみ）出身の適塾生は正式にはわずか6名である（図-8参照）。彼らの名前は竹村恒夫12番、岩切孝哲男久吉19番、木脇分節233番、杉尾尚装 279番、木脇道隆502番、橋口魚蔵386番の6名であったが、種々の文献から黒江炯介195番も日向出身ということになった。この理由は彼の出身地が薩州高岡（鹿児島）と記載されたためである。高岡は現在でもまぎれもなく宮崎県である。従って7人目の適塾生といえる。その他、検本源吾、福島理成、若山伊治については若干の資料もあるが、定かでない。以下各人の資料をあげ検証してみよう。このうち検本源吾は最も適塾生の可能性が高い。



図-8 適塾生の出身地⁶⁾

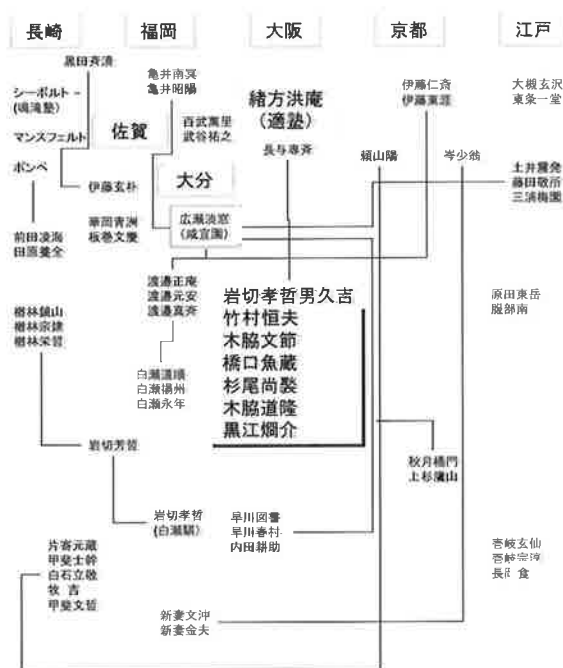


図-9 日向出身の医師たちと彼らの師
—日向出身の適塾生を中心に—

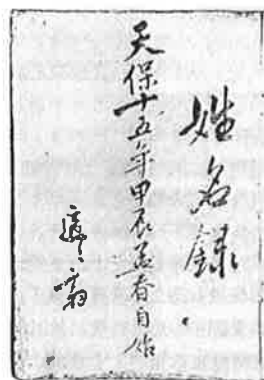


図-10 適塾姓名録⁶⁾

1. 竹村恒夫（図-11）—日向、延岡、延陵藩出身1844（弘化元）、1844年といえは内藤政陽第二代藩主の時であり、1857（安政4）年には医学所、明道館が開設され、竹村恒夫もまた医師の道に憧れたのであろう。延陵ということばは1826（文政9）年生まれの原時行が江戸に出て安井息軒に学び、帰郷後藩政に関係しているが、1872（明治5）年に広業館が廃止された折、新たに内藤家の援助を得て延陵社学という学塾を現在

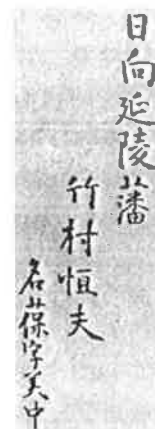


図-11

の岡富中学校跡に建設しているので古くは延陵とは延岡藩の別称と考えてよいだろう。姓名の左横に名葆字美中とあるが、他の姓名録と比較するとこの部分には推薦者などがかけられている。その類あるいは出身地と推定されるが詳しくは不明。

2. いわきりこうてつおとこひさきち 岩切孝哲男久吉 (図-12) - 19番、日向延岡とあるのでこれは正しく延岡藩に間違いない。別の文献によると単に岩切久吉とあり、孝哲男はぬけている。延岡、宮崎では現在でも岩切姓は多く、医療関係者も少なくない。思い出すのは岩切芳哲と岩切孝哲である⁴⁾。岩切芳哲は長崎の檜林鎮山、宋健、栄哲に西洋医学、オランダ医を学んでいる。また岩切孝哲は藩医、白瀬永年の実弟、騏であり、岩切家に後継ぎがないために白瀬家より入籍、岩切家の医師として継続した、岩切孝哲には岩切太刀之助、その子岩切逸男が系図にあるが、久吉という男子名はない。あまり思い切ったことは書けないが、孝哲と何らかの関係のある人物ではないかと考えられる⁴⁾。

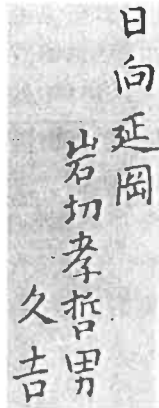


図-12

3. きわきぶんせつ 木脇文節 (図-13) - 日州佐土原藩出身で233番が与えられている。1852 (嘉永5) 年入門。宮崎県佐土原町上用石の出である。日州とは「日州医事」という400号という宮崎県の医事を扱った発刊誌も出ているので宮崎全体を示したものであろう。文節は1823 (文政6) 年、佐土原高麗町にて小野姓で生まれ、後年、木脇家の嗣子となった。木脇家は累代、佐土原藩の侍医、男子がいなかったための処置と思われる、天保末頃、1840年、大坂に出て吉益南涯の門に入り、古法医を学び、1845 (弘化2) 年藩医となるや否や藩令により長崎に直接蘭方医研究に赴いているなど行動は早く時代を見る眼がある。藩候に仕える傍ら、医師として開業、1854 (安政元) 年種痘を実施した。1884 (明治17) 年4月15日細島にて病没63才。ついでながら木脇文節の長男、良は1849 (嘉永2) 年、佐土原にて生まれた。まれ

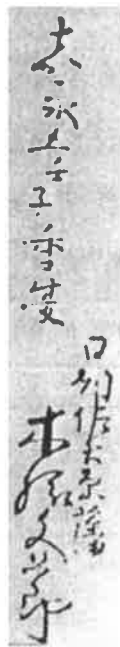


図-13

に見る秀才であり、1869 (明治2) ドイツに留学、ベルリン大学医学部にて医学を修得している、当時の留学生仲間には青木周蔵、萩原三圭、佐藤進、橋本綱常、桂太郎、河島醇などの名がみえることは父の文節が適塾の優等生であったことの証左となるであろう。木脇良は大正7年3月19日、70才で没している。

図-14 木脇文節の墓碑 (日向市)⁷⁾

4. すぎおしょうたん 杉尾尚鑒 (図-15) - 日向、飫肥藩 (現在の宮崎県日南市飫肥) 生まれ。279番。1854 (安政元) 年適塾に入門しているが、何ら詳しい文献はなく不明。ただ飫肥藩は九州の小京都といわれる城下町。明治の外交官外務大臣小村寿太郎、江戸時代後期の儒者安井息軒の出生地でもある。
5. はしくちうおざう 橋口魚蔵 (図-16) - 1856 (安政3) 年、日州耳津 (現在の日向市美々津) に生まれる。386番。名前の左に脚気にて死亡とあるので塾生の時に死亡したと推測される。その他不明。
6. きわきみちたか 木脇道隆 (図-17) - 1857 (安政6) 年入門、502番。日向飫肥藩。杉尾尚鑒より5年遅れての入門。3年後の1860 (万永元) 年、華岡青洲の大坂分塾「合水塾」にも入門したとの記録があるがわず

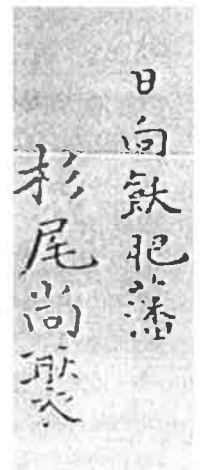


図-15

か2年足らずの在籍である。この記録では飫肥郡那珂町 (伊東修理大天字中) とある。このように当時、有名な師を頼っているような複数の塾に通い塾生となった者もいる。

この木脇道隆は幕末の戊辰戦争に医師として参戦、政府側につき官軍として働いている。その事実が小説に登

場しており、興味があるのでここに一部引用する。捨石嘉市作「幕末飢肥日記―薩摩風邪」と一風変わったタイトルである。その第12章「転戦」の一部である。

「飢肥の陣とお見受け申す」また一人、新潟から飢肥へ帰る途中の者がひょっこりやって来た。一番隊付だった医師・木脇道隆である。

木脇は伊藤鞠真の命で、庄内に向かう隊と分かれ、しばらくの間、新潟の病院を手伝っていたのだ。そこがひと段落ついたので帰途についたのだという。

「今後のことは東京の総督府の指示をあおぐがようございましょう」・・・(略)。

と木脇が2ヶ所にでており、医師でもあり正しく道隆のことである。この小説の中には西郷吉之助、井伊直弼、島津斉彬の弟、久光、安井息軒、小村寿太郎なども出てくる。

7. 黒江炯介(図-18)―先に記述したように姓名表では鹿児島のところにあったため省かれていたが、出生地、薩州高岡は正しくは宮崎県である。1849(嘉永2)年入門、195番とある。炯介、戒介とある文献もある。

父は黒江造道という医家である。若年にして長崎で蘭医学を学ぶ。帰国後、蘭医、漢方医として開業。夫人は同じく適塾門人(5)の橋口魚蔵の娘である。従って炯介は橋口魚蔵の孫ということになる。炯介は幼少にして学才があり、1820(文政3)年、鹿児島の学士館に学び、後に江戸に出て和蘭院語学者、箕作院甫の門に入り、蘭学一般を学ぶ。1847(弘化9)年、突然琉球警備を命ぜられ島津久包に随行、沖縄にも3年間滞在。帰郷してから直ちに大坂に行き、緒方洪庵の適塾に入門している。



図-16



図-17

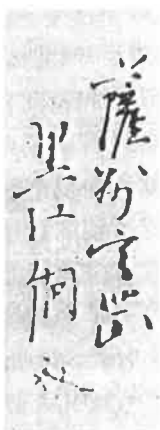


図-18

しかし病気のため、1853(嘉永6)年、帰国し、高岡に帰る途中、1854(安政元)年享年わずか35才で残念ながら死亡している。

8. 検本源吾けんもとげんご―8人目の適塾生としてここにあげるが、名簿にはない。佐土原藩侍医検本洞吾を父として1839(天保10)年佐土原高麗町、木脇文節と同じ町で生まれている。幼少の頃は藩校で和漢を学ぶ。1857(安政4)年、父に従って江戸に行き、1859(安政6)年、大坂に戻り、緒方洪庵について蘭学および蘭方医学を修得。1863(文久3)年、帰郷後侍医となるも1866(慶応2)年戊辰戦争に従軍、医者であったが、監軍(部隊長)としての働きをした。越前→越後→会津→若松と転戦したが若松郊外で戦死。わずか24才という若さである。源吾は適塾の姓名録に記載がないので詳細は不明である。福島理成と若山伊治については詳らかでない。

日向出身の咸宜園門人たち



図-19 広瀬 淡窓¹⁾

日田、「咸宜園」の開設者は、広瀬淡窓1782-1859(天明2-安政3)年(図-19)である。現在、教育の混乱の中にあつて



図-20 咸宜園¹⁾

教育改革が叫ばれているが、近世の日本を代表する最大の漢学塾の教育法が新たに脚光をあびている。では広瀬淡窓とは如何なる人物であり、咸宜園の歴史はどんなものであったのであろうか。

広瀬淡窓は1782（天明2）年日田の豆田魚町、掛屋（江戸時代の金融業）博多屋、広瀬家五代、三郎右衛門の長男として生まれた。幼名は寅之助、後に求馬、淡窓は雅号、諱は建、字は廉郷あるいは子基。別名として青澄が与えられている。

三代、四代とも漢詩、俳諧をたしなみ学問を好む家系であった。淡窓は幼少にして聡明、学問や詩作に秀で頭角を現す。淡窓は佐伯への短い遊学をするなどしていたが、1797（寛政9）年、15才の時、願いがかなって福岡（筑前・博多）に出て亀井南冥・昭陽の塾に3年間入門（図-9参照）。しかしかねてどちらかといえば病弱であったこともあり病となって日田に帰郷。一時、生命に危機という事態もあったが肥後の医師、倉重湊によって一命をとりとめる。これをきっかけとして掛屋の後を継ぐことを弟の久兵衛にゆずり学者、教育者の道を選ぶ。24才の時1805（文化2）年丸田町の長沼寺の学寮に初めて二人の弟子をとり淡窓の塾頭としての歩みが始まった。その年に大坂尾林左衛門宅に「成章舎」、翌年、長福寺そばに「桂林園」を建てる。そして桂林園を現在の堀田村に移して「咸宜園」としたのは1817（文化14）年のことであった。淡窓36才であった。塾の教育方針はつとに有名な「三奪の法」すなわち年齢、学歴、身分を問わない。ほとんど誰でも入門可能。合理的な能力主義のため全国からこの小さな町、日田に入門者が殺到した。1897（明治3）年までの90年間の入門

者は全国68ヶ所中66ヶ国におよび、3430名を数えた。その出身地は図-21の通りであった。淡窓は1856（安政3）年、73才で没している。淡窓の教育の根幹は単に学識ではなく詩作を通しての豊かな感性を養うこと、と同時に規律や礼節の重要性を徹底して教育指導したこと。常に「鋭きも鈍きもともに捨てがたし金槌と木槌とに使いわけなば」といい、賢愚も鋭鈍もどちらとも個性である。それらを教え育てることをモットーとした。本学の建学の理念「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」と一脈相通するものがある。「敬天」は基本理念であった、死後も広瀬旭花や林外青邨によって咸宜園は運営された。九代の塾主、80年間の塾生数は4,600余人という。我が国、最大の塾といわれる故因である。塾生で有名な人は以下のようにであった。墓所は大分県日田市中城町長生園にある。

- | | |
|--------|---|
| 高野 長英 | 蘭学者・蘭医。『戊戌夢物語』で幕政を批判した |
| 岡 研介 | 蘭医。シーボルトにも師事 |
| 大村 益次郎 | 四境戦争で活躍後、戊辰戦争で参謀。戦後、兵部大輔となり日本陸軍の基礎を築く |
| 上野 彦馬 | 日本最初期の写真家 |
| 中島 子玉 | 儒学者。淡窓に「人才此人ヲ以テ第一」と賞賛され、咸宜園の都講（塾頭）となるが師に先立ち早世。墓碑銘は淡窓自身が書いている。 |
| 松田 道之 | 滋賀県令・東京府知事を歴任、琉球処分 |



図-21 咸宜園生の出身地¹¹⁾

	活躍	
長 三州	戊辰戦争に参謀として参加後、文部大丞などを歴任	
島 惟精	岩手・茨城県令などを歴任	
中村 元雄	県令などを歴任後、貴族院議員	
大隈 言遣	国学者・歌人	
帆走 杏雨	画家。田能村竹田に師事した豊後南画の作家	
平野 五岳	詩・書・画に優れ「鎮西の三絶僧」と呼ばれる。詩を淡窓に、画を田能村竹田に学ぶ	
(淡窓没後)		
横田 国臣	法律家。検事総長・大審院長を歴任	
清浦 奎吾	政治家。枢密院議長から内閣総理大臣	
河村 豊州	海軍軍医総監。52歳で公職をひき「後進の為進路を開く」と述べた。	
朝吹 英二	尊皇攘夷活動家。福澤諭吉に学んだのち実業家。三菱・三井の双方で活躍。	
秋月新太郎	秋月橋門の子。東京女子師範学校長・貴族院議員	

日向出身の咸宜園の門人の名は次のような人で全員で61人という記録がある¹⁰⁾。

毛利文逸、平内篤胤、高妻騰雲、高妻玉雲、中尾真郷、福島 昱 二、杉田房吉、中尾時太郎、秋月橋門、渡辺元安、内田耕助、早川春村、山室綱一郎、河野泰貞、早川喜多蔵、権藤円海（空華）、松本大忍、小田生民、若杉巴、三屋春波、衛藤季治、熊谷卓爾、花立亮庵、松井玄助、植松光節、吉田伝之助、山内純亮、阿南唯蔵、永田英太郎、赤坂隼蔵、児玉潤蔵、三宅嘉吉、土田主汁、日高元敬、毛利文之輔、後藤貞蔵、加藤山寿、芳賀連、中尾直次郎、中尾時太郎、時任竜太郎、南村猶助、日高俊平、長嶺秀節、宇都宮尚貴、杉田平三郎、町田宗六、佐藤仙吾、日高謙蔵、鳥原玄了、歌津倉吉、水筑周一、三原元甫、児玉敬蔵、54名、あとは寺院の僧が門人となっているが名が明らかでないので省いた。

以下に重要人物の略歴を示す。

秋月橋門（1809-1880）

1824（文政7）年16才の時咸宜園に入門。後に医業を志す¹⁾。

早川春村（1838-1890）

父は豊後佐伯藩の丈夫、益田帯刀の第6子。天保9年生まれる。5才の時、延岡藩の侍医早川図書²⁾の養嗣子となる。17才の時咸宜園に入門。後に万延元年、京都に医術を修めた、後に侍医となる。

内田耕助（1820-1875）

儒者。弘化3年より3年間咸宜園に入門。後に藩校、広業館の

教授となる。

まとめ

江戸末期。大坂の緒方洪庵の蘭学塾「適塾」に学んだ日向出身の八名、岩切孝哲男久吉、竹林恒夫、木脇文節、橋口魚蔵、杉尾尚葵^{すぎおしやうたん}、木脇道隆、黒江炯介、検本源吾。さらに大分、日田の広瀬淡窓の漢学塾、咸宜園に入門した同じく日向出身の高妻騰雲、高妻玉雲、杉田房吉、秋月橋門、渡邊元安、早川春村など54名をあげることができた。この混乱期この日向という僻地から笈を負うて向学の精神に燃え、大坂、日田に医家を目指した若者たちを彼らの地理的、歴史的、文教的背景と共にまとめた。

参考文献

- 1) 山本郁男、岩井勝正、井本真澄、宇佐見則行：日向薬事始め（その1）—秋月橋門とその業績—, 九州保健福祉大学研究紀要 6: 277-285, 2005.
- 2) 岩井勝正、井本真澄、宇佐見則行、山本郁男：日向薬事始め（その2）—賀来飛霞と延岡藩での採葉—, 日本薬学会第125年会, 東京, 要旨集4: 219, 2005.
- 3) 山本郁男、宇佐見則行、井本真澄、岸 信行：日向薬事始め（その3）—延岡の医祖、渡邊正庵とその周辺—, 九州保健福祉大学研究紀要 8: 187-192, 2007.
- 4) 山本郁男、宇佐見則行、井本真澄、岸信行：日向薬（くすり）事始め（その4）—延岡藩侍医、白瀬道順と白瀬永年—, 九州保健福祉大学研究紀要 9: 169-175, 2008.
- 5) 世界教養全集17, 杉田玄白蘭学事始, 平凡社, 東京, 1963.
- 6) 伴忠康：適塾をめぐる人々—蘭学の流れ—, 創元社, 東京, 1981.
- 7) 梅溪 昇, 藤田 実, 井門千里：緒方洪庵と適塾, 適塾記念会, 1980.
- 8) (社) 宮崎県医師会：宮崎県医史, (社) 宮崎県医師会, 宮崎, 1978.
- 9) 捨石嘉市：小説, 幕末飢肥日記, 薩摩風邪第12章「転戦」の項.
- 10) 宮崎県立本庄高等学校郷土部編：筆塚 日田広瀬淡窓咸宜園入門者（日向の人々）—一覧表, pp9-12, 1969.
- 11) 海原 徹：広瀬淡窓と咸宜園, ミネルヴァ書房, 京都, 2008.
- 12) 日高次吉：宮崎県の歴史, (1955)
- 13) 二木謙一監修, 工藤寛正編：藩と城下町の事典, 東京出版, 東京, 2004.